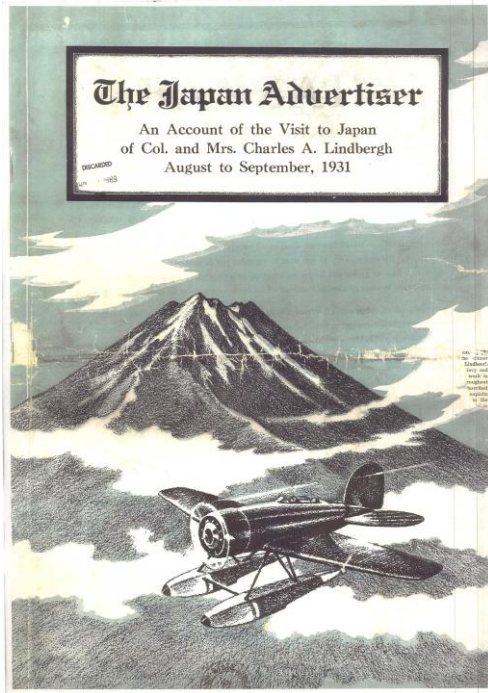




Vol.1-02

はじめに

《三好企画の web サイトに掲載されている文は全て著作権法により保護されます。日本語訳の著作権は三好企画が保有しています。掲載されている文の閲覧と印刷には制限なく、研究にご利用ください。ただし、全文をコピーして流用すること、改ざんすることはお断りします。

これは 1931 年の日本社会、世界の航空機、航路についての貴重な記録です。論文の部分引用にあたっては、「出典」として下記をご掲載ください。》

『ジャパン・アドヴァタイザー』The Japan Advertiser 1931 年 10 月 10 日、ジャパン・アドヴァタイザー発行 日本語訳・三好企画 2025 年

アメリカで出版されたアン・モロウ・リンドバーグ著『海からの贈り物』（1955 年）の 70 年目の記念として、まずは一部を公開します。

凡例

〔 〕 及び＊のある部分は、訳註である。
原文は英語なので、漢字表記が不明のものはカタカナにした。
原版はタブロイド判 32 ページ、報道内容が重なった部分があるので一部を割愛した。

翻訳協力 順不同、敬称略

リーブ・リンドバーグ 兼子 奈緒美 中川 経子 浅野 正弘

1931年8月22～23日

リンドバーグ夫妻 濃霧のため紗那沼に不時着

3ページ

再度挑戦するも、根室に到達できず

日本政府関係者はリンドバーグ夫妻の身を案じ、択捉島への着陸を助言

8月22日、チャールズ・A・リンドバーグ大佐夫妻は武魯頓湾で、首尾よくシリウス号のエンジンを修理した後、飛行を再開したが、また根室に到達できなかった。北海道の港に濃霧がたちこめていたため、現地の政府関係者は夫妻の水上飛行機が安全に着水できないのではないかと案じた。その晩、リンドバーグ夫妻は無電の指示に従い、択捉島北西部沿岸の紗那村近くの沼に着水した。

リンドバーグ夫妻は明け方に起床し、一刻も早くエンジンの修理にとりかかろうとした。昨日の朝の計吐夷島よりも、空はさらに晴れ渡っていた。太陽は輝き、湾の海面は穏やかで、狭まっている湾の入り口の向こうには、シムシル丸が停泊している。

午前5時30分、夫妻はボートに乗り込んで岸を離れた。漕いでいるのはリンドバーグ大佐だ。光沢を帯びた黒と深紅の単葉機は、朝日を浴びて輝いている。リンドバーグ夫人は前方のコックピットに乗り込み、大佐はフロートの間の支柱の上に陣取った。そこからだと、エンジンの部品全てに手が届くからだ。

二人が作業を始めて間もなく、エンジンカバーを取り除かれてエンジンが剥き出しになっている時に、シムシル丸のランチが近づいてきた。高木三郎船長は夫妻に挨拶したあと、修理のはかどり具合を尋ねた。リンドバーグ大佐は「すべてを検査するには2時間かかるだろう。そのあと試験飛行をする」と答えた。

高木船長が「落石無線局では、お二人の様子をととても知りたがっているのですが……」と話を続けると、夫妻はその気遣いに対する謝意を述べた。リンドバーグ夫人はコックピットの後方で、金曜日に不具合が生じた無線送信機の修理に取り組んでいるところだったが、連絡がとれなくなってしまったことについて、「落石局と日本の政府関係者には、まもなく感謝を伝えることができるでしょう」と述べた。

修理を終え、リンドバーグ大佐はエンジンの始動を試みたが、エンジンは何度か回転したものの、その速度はかなり遅く、詰まったような音をたてていたので、依然として完璧な状態ではないことがわかった。さらに何度か試してみたが、エンジンは思うように動かなかった。シムシル丸からの報告によると、「夫妻はこのエンジン・トラブルにいささか懸念を抱

いているようである」とのことであつた。二人が5時間ほどかけても修理がうまくいかなかったので、シムシル丸の通信士は落石局に「本日中に出発の見込みは薄い」と連絡した。

エンジン修理完了

落石無線局が続報を受け取ったとしても、それは発表されていない。12時35分、リンドバーグ大佐から「修理が完了し、エンジンの調子は完璧である」と、突然連絡があつた。「南の方の天候が良好であれば、午後1時30分に出発したい」という。落石局は^{エトロフ}択捉島と^{クナシリ}国後島および根室の気象状況の詳細をかいつまんで返信した。各地とも天候は良好だった。根室では3.4mの北東の風が吹いており、霧もほとんど出ていなかった。

しかし、リンドバーグ夫妻がシムシル丸の乗務員に別れを告げ、^{ムロトン}武魯頓湾の海上から飛び立ったときには2時10分になっていた。2時16分にリンドバーグ夫人は、「すべては快調で、エンジンもこれまでのような不調を示す兆候はない」と落石局に連絡をしてきた。^{エトロフ}択捉島北部の海岸に位置する^{シヤナ}紗那無線局は、「現在のところ天気は良好」と伝えた。^{クナシリ}国後島南部の上空は霧がかかっていたが、根室は晴れていた。

霧の発生

午後3時30分頃、根室上空に霧が発生する兆しがみえてきた。風向きが南東から東にかわっており、視界は急激に不良となった。根室港の外側は1メートル先も見えないほどだったので、シリウス号が無事に着水できるか危ぶまれてきた。根室气象台は「夕方にかけて更に霧は濃くなる」と予報していた。

これより少し前、リンドバーグ夫人から「進路を東にとっている」ことを知らせながら、「飛行機は^{ウルツ}得撫島北東の先端からおおよそ10mの位置を飛行中」と無電があつた。時速170kmで高度2,000mを飛行中であつた。濃霧がたちこめており、視界が約30mであつた。

午後4時7分、根室上空の霧は少し晴れた。また、風向きは再び南東に変わりつつあつた。だが、天候の好転は長続きせず、結局夫妻は「紗那近くの岬・別飛、別名ベツブで、その晩の緊急着水地を探すように」と助言を受けた。4時30分のことである。リンドバーグ夫妻は、指示された地点を見つけることができなかったのも、ついには「これから紗那に着水する」と無電を打った。

4時48分、漁村の港の上空に夫妻の飛行機が現れ、上空を4回旋回した。夫妻が訪れることは根室から連絡があつたものの、急な決定だったため、ほとんどの村人は、その晩リンドバ

ーグ夫妻が自分たちの村に滞在することを知らなかった。3ヶ月以上前に吉原清二が訪れてから初めて聞く耳慣れぬエンジンの音に、人々は皆家を飛び出して急いで海岸に向かった。

沼に着水

しかし、リンドバーグ夫妻は村の表玄関からは入らないことにした。港は退避する余裕がなかった小型漁船で混みあっており、安全に着水できるかどうか大佐は確信が持てなかったのだ。村の北方約1,600mの場所にうってつけな沼が大佐の目にとまった。午後5時5分、シリウス号はその沼に着水した。

そこはサケ・マスの稚魚を育てる官営の孵化場^{ふか}だった。岸からボートを漕ぎ出してリンドバーグ夫妻を連れ帰ったのは、その職員のひとりである。

整備された自動車で村と沼はつながっていたので、ほどなく夫妻は紗那村の役人達に迎えられた。

この辺境の村は国際的な出来事とはほとんど無縁だったが、アメリカ人飛行家夫妻を迎える日本最初の寄航地という栄誉を、根室から譲りうけることになった。というのも、さきの武魯頓湾^{ムロトン}を「滞在地」と考える者はまず、いないであろうから。

その夜遅く、午後8時48分に落石局が紗那村から受けた最初の情報によると、「リンドバーグ夫妻は依然として機内にとどまっている」とのことであった。

栄えている村

都市から離れているものの、紗那は栄えている村である。郵便局、無線局、小学校、病院が設置されている。漁業がおもな産業で、地元の水揚げの多くは三井の缶詰工場^{シヤナ}で加工されている。ひと月に3回、北海道本土から汽船が寄港する。村の周囲の土地はほとんど開墾されておらず、夜になるとしばしばサケやマスの稚魚に目のない熊がやってくる沼ーリンドバーグ夫妻が着水した孵化場ーからは1,600mほど離れている。

この島自体は、択捉、エトロフ、イェトロフ、イトープ、アトーカ、ゴルトツプ、悪魔島など、様々な名前で知られているが、千島列島の中でもっとも大きく豊かな島である。長さはおよそ176km、幅は3kmから32kmである。8つの脊梁山脈には900mから1,500m級の山々が島の中心に沿ってそびえ立ち、山脈の間を低い比較的平坦なくぼ地がつないでいる。時として、5つもの活火山が同時に活動することもある。紗那もそうだが、おもな居留地と漁業

の拠点はすべてオホーツク海側に集中している。こちらの方が夏季に霧に見舞われることが少ないからである。太平洋岸には鯨がよく姿を現す。

8月23日、再度のエンジン不調

8月22日の夜8時過ぎ、リンドバーグ大佐と夫人は出迎えた紗那^{シヤナ}の村人に説得されて村に入り、その晩は宿に泊まることにした。消防団と青年団が見張りの任についているので、夫妻の単葉飛行機は全く心配ないと村人達はうけあった。沼と漁村は整備された幹線道路で結ばれているので、まもなく夫妻と付き添っている村人達は一番手前の家並みのそばまでたどり着いた。そこから村役場までの道の両側には、二人の外国人訪問者をひと目見ようと、また、二人の身の上に起こった出来事を知りたくてたまらない住人達が立ち並んでいた。報告によると、リンドバーグ夫妻は村人のあからさまな好奇心を非常に気さくに受け止め、飛行予定の再度の遅れにも全く気落ちしている様子は見られなかったそうである。

村役場の玄関は入りきれなかった村人で混雑しており、建物の中では村の首長たちが多少形式ばって、夫妻を迎えた喜びと歓迎の意を表そうとしていた。一方リンドバーグ大佐は、「ご親切には妻共々、感謝に耐えないが、自分達のこと村人達にあまり面倒をかけたくないと思っている」と答えた。また、「もともと武魯頓湾^{ムロトン}から根室まで直接飛ぶつもりだったが、北海道の港の上空に濃霧が発生しているため、明日まで紗那^{シヤナ}で待機した方が良い」と落石局から助言されたことを話した。天候が許せば明朝出発して目的地まで飛ぶ予定だと言う。

村人の何人かと話をしている時、計吐夷島^{ケトイ}と武魯頓湾では、時にはつらい体験もしたと、リンドバーグ大佐はうちあけている。午後9時40分頃、部屋に入ってきた村人が、「東京のラジオ局JOAKがリンドバーグ夫妻のニュースを放送している」と言った。「夫妻が紗那近郊の沼で熊に襲われる危険にさらされている」というものだった。これには、村人ばかりかリンドバーグ夫妻も大笑いした。熊が沼にやってきて官営の孵化場で養殖されている稚魚を捕ることはあるが、これまで人間に危害を加えたことはないと夫妻は説明された。

村役場での歓迎会は10時に終わり、紗那村の村長以下のお偉方は、択捉島内で最高級ホテルと言われている倉澤旅館までリンドバーグ大佐夫妻を送りとどけた。夫妻の滞在のためにすべての手配をして通訳の任にあたった島の住民は、択捉島の貿易会社・石原合名会社の重役、小林ケイキチ氏である。小林氏は「紗那の王」と言う異名を持っている。

8月23日の朝、夫妻は早朝に起床し、「ドテラ」にくるまり、畳に座って和風の朝食をとった。女中のひとりが、リンドバーグ大佐が奇抜なドテラの着こなしをしているので、たいへ

ん面白がった。二人に出された料理のなかにサケとタコがあった。夫妻はサケは気に入ったようであるが、ほかの珍味に対しては、食欲よりむしろ好奇心がそそられたようである。

リンドバーグ夫妻に伝えられた気象状況は好ましいものではなかった。紗那は霧雨だったが、根室では午前3時からずっと激しい雷雨に見舞われていたのである。

正午近くになると、空が晴れてきた。リンドバーグ夫妻はシリウス号のそばに行き、根室に飛ぶための準備にとりかかった。午後2時25分に夫妻は出発した。

しかし、霧に襲われ、目的地への到着は再度阻まれた。夫妻が根室港にどこまで接近したかは定かではないが、午後5時30分、リンドバーグ夫人から「湖に着水して無事である」との連絡があった。その場所は、千島列島の中で根室にもっとも近い国後島の東沸くなしりからおよそ3.2km北西に位置するアンノル沼であることが後に判明した。

午後4時45分、「飛行機の操縦に集中するために無電連絡を中断せざるを得ない」と夫妻が伝えてきてから、5時30分に再び連絡があるまでの30分あまり、根室では不安な時をすごしていた。夫妻の身の上に何が起こったのか分からない上に、この濃霧の中では無事に着水することが困難だったからだ。

所在不明

「無事である」と第一報がはいったものの、リンドバーグ夫妻の所在は依然として不明だった。リンドバーグ夫人が湖と言っていたので、二人が着水したのはおそらく、根室から29kmほど離れた国後島の東沸とうふつ居留地近辺の西方にある東沸湖ではないかと考えられた。援助を提供できるかどうか確認するために、国後島に船を派遣する準備が行われた。

午後5時30分、リンドバーグ夫人から次のような無電があった。「シリウス号は根室のすぐ近くまで来たが、霧が非常に濃く、全く視界がきかなかった。ガソリンの備蓄も多くないので着水する場所を探さなければならなかった。飛行機を北に大きく旋回させた時に、この湖が見えた」。無電では「場所はおそらく国後島であろう」と言っていたが、詳細は伝えられなかった。

その6分後、落石局に次のような連絡がはいった。「明朝9時に連絡する」「ここの地名は不明」。

それからまもなく、島の住人が夫妻の救援にやって来た。「着水地点はアンノル沼」だと、リンドバーグ夫人が6時35分に無電を打ったためである。紗那近くで夫妻が着水した沼と同様、アンノル沼も政府がサケ・マスの孵化場として利用していた。

東沸の村人たちは馬に乗って湖に向かった。村からの報告によると、機体に損傷はないと

のことであった。リンドバーグ大佐夫妻は、「アリガトウ」と、ただひとつ知っている日本語を繰り返し言いながら、村人たちに朗らかに挨拶をした。東沸からやって来た人々は誰ひとり英語を話さなかったのも、お互いに身振り手振りで意思を伝えるしかなかった。そこで、なかのひとりが村に引き返してこの出来事を知らせ、英語を知っている住民二人をリンドバーグ夫妻のもとに連れて戻ってきた。東沸には40軒ほどの家があり、人口はおよそ300人で、郵便局もある。根室からはモーターボートで3、4時間の距離である。

目を引く火山

国後島は、霧が出ていなければ根室から容易に訪れることができる。蟹の缶詰工場が有名だ。島の北端でもっとも人目をひくのは、堂々とした姿のちゃちゃだけ爺爺岳である。標高1840メートル、頂上を切れ落としたような円錐形をしており、火口には、もうひとつ頂きが突き出ている。島の中央にそびえるどっしりとした山は894mのしまのぼり島登山である。山並みのふもとには小さな森やまばらな樹木が生えており、笹竹が生い茂っている。海岸線は岩でゴツゴツしているが、海ではニシン、サケ、イワシが多く獲れる。熊も多数生息している。

根室での不安

一方根室では8月23日、不安な一日を過ごしていた。誰もが気をもんでいたのも、「場所
は不明だが飛行機は無事に着水した」とリンドバーグ夫人が落石局に知らせてきた時には、
安堵の歓声が上がった。

天候が良かったのは午後2時25分に夫妻が紗那から飛び立ったときだけで、3時には明らかに荒れ模様になっていた。

灰色の霧が海面に低くたれこめ、街の家並みの狭い隙間でさえ埋めつくしていた。風向きが変わって霧を払ってくれるかもしれないという見込みがなかったら、おそらくリンドバーグ夫妻に引き返すよう指示が出されていただろう。

夫妻が飛び立ってから、この時すでに30分以上たっており、国後島には着水に適すると思われる場所がないので、政府関係者は島に着水するようにと指示をしなかった。午後4時18分、「15分ほどでそちらに到着する」とリンドバーグ夫人は落石局に連絡した。

これが合図となり、港では大掛かりな準備が始まった。すべての船舶は警笛を鳴らし始め、
はくほう官船・白鳳丸は空にサーチライトを向けた。街の人々は海岸に立ち並び、その大多数が霧の向こうに飛行機の姿を捉えようと上空をじっと見つめていた。警笛は飛行機のエンジン音を

かき消すほどの大音響をたてていた。

4時45分、「根室のすぐ近くまで来ているはずだが、視界が全くきかない」とリンドバーグ夫妻が言っているーと無線局から報告が入った。炎が灯台のかわりになるかもしれないので、かがり火を焚いてほしいと要請した。かがり火が焚かれ、警笛も鳴り続け、白鳳丸のサーチライトは弧を描いた。しかし、霧があまりに濃いので光が届かない。間近でさえ、かがり火の炎もサーチライトの光も、ぼんやりとしか見えなかった。

当時の鐘ヶ淵紡績の広告

JAPAN, LAND OF THE RISING
SUN, STANDS AT THE GATE-
WAY OF THE ORIENT, HER
EYES TURNED, NOT UPON
THE ASIA FROM WHICH
SPRANG HER ANCIENT
CIVILIZATION AND CUL-
TURE, BUT UPON THE IN-
DUSTRIAL LANDS OF THE
OCCIDENT. TO COLONEL
AND MRS. CHARLES AUGUS-
TUS LINDBERGH, ENVOYS
OF THAT CIVILIZATION AND
BEARERS OF A MESSAGE
OF GOOD WILL FROM THE
AMERICAN PEOPLE, WE
EXTEND OUR HEARTIEST
FELICITATIONS.

KANEGAFUCHI
SPINNING CO., LTD.
HYOGO

1931年8月24～25日

根室はリンドバーグ夫妻を大歓迎

大佐、公式歓迎会と祝宴でスピーチ

——内輪で芸者のお座敷宴会——飛行続行前の休養

霧に見舞われて三度不時着を強いられ、そのため、エンジンが一時故障するという困難を乗り越えて、8月24日の朝、リンドバーグ夫妻は根室湾に着水した。北に遡ること1,443km、カムチャッカ半島東沿岸の町ペトロハバロフスクを飛び立ち、当初の予定より5日間の遅れである。

二人とも疲れていた。身に着けた服にはオイルの染みがついている。だが、根室の住人のみならず街にやってきた数千人の熱狂的な歓迎に、夫妻は真心でこたえた。人々の熱狂的歓迎は夫妻に捧げる感動的な賞賛となり、夫妻の飛行にかきたてられた興味は最高潮に達した。もっとも、リンドバーグ夫妻が予定通りに到着したとしても、非常に暖かく迎えられたはずである。しかし、この一週間の苦労があったからこそ、大佐が単身大西洋無着陸飛行を成し遂げた著名なアメリカ人というだけではなく、日本人に好まれる資質を備えたひとりの人間の姿を見せたからこそその熱狂ではある。

その夜、リンドバーグ夫妻に対して、日本を代表する役目を成功裡に終えたことを確信して、根室の街は眠りについた。また、根室滞在は夫妻にとって文明社会への回帰でもあった。海岸沿いにぎっしりと並んだ群衆、二美喜旅館^{にびき}へと続く行列、朝食に出たハムエッグ、「ハロー、リンディ!」の叫び声、そして多忙だった一日の華々しい出来事など、すべて夫妻にとって忘れがたいものだろう。

活気にあふれた町

リンドバーグ夫妻が国後島のアンノル沼から飛び立つかなり前から、根室近郊の町の首長たちはリンドバーグ夫妻の上陸予定地にある、旗で飾られたアーチに集まっていた。その中には、安藤石典^{いしすけ}町長、アメリカ駐日大使館のアレンダー・スィフト大尉、古館根室税関局長、地元の在郷軍人会長・古川〔繁次郎〕氏、警察署長山口氏、根室气象台長スズミ氏、そして根室郵便局長今村〔敬爾〕氏の姿があった。足場の良い砂洲の上には地元の小学校と中学校の生徒が整列して、水上飛行機が到着したら打ち振ろうと各々の手に日本とアメリカの国旗を握りしめている。

午前7時23分、空中で花火が続けざまに炸裂し、見物人たちの間に期待で身震いが走った。リンドバーグ夫妻の飛行機がすでに飛び立ち、こちらに向かっている合図だった。15分ほどすると、視力の良い者が何人か叫び声を上げて西北の空を指差した。そこには3つの黒い点がぐんぐんと大きさを増してくる。リンドバーグ夫妻の飛行機と、それに付き添う東京朝日新聞社および札幌北海タイムスの飛行機である。3機は高度約500メートル上空を飛んでおり、海上で一度大きく旋回した。花火がさらに打ち上げられた。群集から歓声が上がり、子供たちは手にした旗を振り始めた。港の片側に寄せて停泊している船は警笛を鳴り響かせた。

優雅な着水

3機は紅煙岬ベニケムイの上空を越えてやってきたが、付き添いの2機が上空にとどまっている間に、リンドバーグ夫妻の飛行機は7時51分、穏やかな海面に着水して、指定されたブイのところまで進み、滑らかに停止した。夫妻は二人ともコックピットの中で立ち上がり、迎えの群集から湧きあがる「万歳」の歓声に「ハロー、ハロー」と答えた。リンドバーグ大佐のカーキ色のシャツにはオイルの染みがつき、顔は日に焼けている。大佐は片方のフロートに飛び移り、ブイにロープを投げかけた。一方、リンドバーグ夫人は再び機内に腰をおろして、シリウス号を離れる前に無線通信機の状態に問題がないことを確認した。

これに先立つこと5分前、リンドバーグ夫人は落石局に、目的地にたどり着けるよう援助を差しのべてくれた日本人に向けてメッセージを送っている。「私たちがペトロハバロフスクを発って以来示してしていただいた援助とお気遣いに対し、日本の皆さん、とりわけ根室の皆さんに感謝します。」「間もなく皆さんにお会いできますが、到着前にこの気持ちを伝えしておきたいと思います。」

着水後のプロペラの回転が止まらないうちに、出迎えの政府関係者を乗せたランチが岸辺を離れた。一行の中には安藤町長、スィフト大使、検疫所の役人ほか数名がいた。もっとも、シリウス号に近寄ろうとしていたのはこの一行だけではない。新聞記者とカメラマンを乗せた船も何艘か漕ぎ出していた。

リンドバーグ夫人は誰の手も借りずにコックピットから出て、あっという間にボートに乗り移った。夫人のブルーのシャツは首のボタンを外してあり、大佐のシャツ同様オイルの染みがついており、カーキ色のホイップコードの半ズボンと長ブーツをはいていた。「日本人の女性と同じくらいの背丈だ」と群集の何人かが噂した。

リンドバーグ大佐は最初の挨拶がすむと、自分の単葉機がしっかり錨で固定されているのか、青年団の団員が見張りについて、船で近寄ってくる好奇心でいっぱいの多くの人達から

守られているのかを確認したいと強く要望した。大佐の頬は紅潮していた。他人から注目されていることを察すると、いつもそうなるとのことだ。ようやく、大佐は農林省のランチ・

はくほう

白鳳丸に乗り込み、船は岸を目指して漕ぎ出した。

歓迎用のアーチの前で、スィフト大使はリンドバーグ大佐に、安藤市長はリンドバーグ夫人に、ランチから降りるときに手を貸した。税関で手短な審査が行われた。リンドバーグ夫妻は2挺のリボルバー銃を申告した。やむなく辺境の地に不時着した場合、そこで野獣に襲われる可能性があったので、その危険から自分達の身を守るために所持していたのだ。花束が次から次へと贈呈された。そのなかに、この出迎えに加わるために、はるばる東京から訪れた2名の外国人女性からの花束もあった。

二人の飛行士の姿を見ようと懸命になっている群集は、警察の非常線によって規制されていたが、押し寄せる人波の力は大きくなり、またたく間に、出迎えに公式に臨んだ人々のまわりの空間がほとんどなくなってしまった。安藤市長の音頭のもと万歳三唱が行われ、楽団は「星条旗を永遠なれ」を演奏した。群集を整理して、アメリカと日本の国旗で飾られた車が停めてあるところまで通り道がつくられたが、妻が押しつぶされないよう、リンドバーグ大佐はその体をしっかりと引き寄せていなければならないほどだった。

夫妻は栈橋を出発し、1週間以上前から部屋が用意されている二美喜旅館に車で向かった。道路沿いでは街の人々がずっと歓声を上げつづけていて、その声は早くも掠れていた。旅館の前では、支配人、その妻、幼い娘が二人、そして従業員全員が、リンドバーグ夫妻が車から降りる間中ずっと丁寧にお辞儀をしていた。スィフト大使は日本の旅館に上がる前には靴を脱ぐのがこの国の慣わしであると、リンドバーグ大佐に説明し、夫妻は玄関の上がり口に腰をおろした。

二人が2階に用意された部屋に着いたとき、旅館の外にいる群衆が出てきて姿を見せて欲しいと叫んだ。ひとりが「ハロー、リンディ!」と呼びかけると、大佐と夫人がバルコニーに姿をあらわしたので、人々は大喜びだった。大佐は「根室に来られてたいへんうれしい。そして、皆さんの親切に感謝している」と話しかけた。旅館の外の群衆が散り始めたのは、夫妻が部屋の中に戻ってかなりたってからだった。

午後の行事に備えて休息するため、夫妻は飛行服から日本の浴衣に着替えた。旅館の女中たちの話によると、リンドバーグ夫人の浴衣は身体にぴったり合っていたが、「リンディ」には短すぎたので、思わず二人とも笑ってしまったそうだ。もっとも、日本人の女中というものは着物姿の外国人を見ると、いかにサイズがぴったりであろうと、笑わずにはいられないものである。紗那村で着方を教わったことを示しながら、大佐は帯を腰に巻きつけて後ろで結んだ。夫妻は風呂に入ってから朝食をとった。メニューはトースト、ハムエッグ、コー

ヒー、葡萄と桃である。二人とも祝電の束にはほとんど興味を示さなかった。リンドバーグ大佐が真っ先にしたのは「二人とも無事で元気だ」と、自分の母親と妻の両親に電報を打つことだった。

学校へ

夫妻はスィフト大使の部屋を訪れて、今後の予定を簡単に打ち合わせ、今日の午後リンドバーグ大佐が求められるであろうスピーチの草稿を用意した。二人は午後1時、旅館を出発して根室の生徒が全員集まっている小学校〔花咲尋常高等小学校、現・根室市立花咲小学校〕に向かった。町長と生徒の代表ひとりがスピーチを行った後、リンドバーグ大佐は答辞のスピーチを行った。そのあと生徒達は「星条旗よ永遠なれ」を歌い、町長と新聞社の代表数人から夫妻に花束が贈呈された。

安藤町長のスピーチを以下に再録する。

「リンドバーグ大佐および夫人、このたびは光栄にも根室の町民を代表して、お二人に心からの歓迎の意を表すとともに、航空界でも最高の偉業のひとつに数えられる太平洋横断飛行の大成功に、お祝いの言葉を述べさせていただきます。」

「リンドバーグ大佐、1927年のニューヨーク・パリ間無着陸飛行は、その成功により全世界にセンセーションを巻き起こし、それによって打ち立てられた大佐の名声はすでにわたくしどもの良く知るところです。そしていま、またもや記憶すべき1931年のこの瞬間にリンドバーグ大佐と夫人はこの驚くべき太平洋横断を、航空界のすべての人々が果たそうと願ってやまない、最も偉大で困難な企てを試み、成し遂げました。」

「お二人の優秀な技術と無類の勇氣により達成されたこのたびの大空の制覇は、世界を驚かせただけでなく、航空史上、画期的な功績として後世に残ることは疑いありません。」

「わたくしども根室の町民はこぞって大佐と夫人を歓迎し、お二人のこの素晴らしい偉業を心より祝します。近年アメリカと日本の友好は益々深まっております。わたくしどもは、今回の飛行によりこの根室の町が二国間の飛行ルートの重要な地点として認められ、また、今後二国間の友好を深める重要な役割を果たすことを心底から切に願っております。」

飛行の今後

「私たちは二人とも、根室、そして日本に来られたことをたいへん嬉しく思います」リンドバーグ大佐は祝辞に答えて述べた。「飛行機で数週間ではなく、数時間でこの二国間を飛

ぶまでには、多くの年月を必要としないであろうと思います。」

「私たちが根室に到着したのは本日ですが、実際にはアラスカを発って以来、何日間も皆さんとお話しをしています。受け取った無電のメッセージは、前もって天候の良し悪しを教えてくれるのでたいへん助かりました。昨晚、私たちは美しい千島列島のある島のある湖で過ごしました。また、その前の晩には紗那村で暖かく迎えていただきました。到着の際にこちらで受けた素晴らしい歓迎と、あらゆるところで出来る限りの援助をして下さったことに、大変感謝しております。」

歓迎会に続いてリンドバーグ夫妻は町の公会堂〔根室公会堂、同年8月に新築落成。〕に案内され、そこでは400名もの人々が集まり、祝宴が催された。

安藤市長はつぎのように述べて乾杯の音頭をとった。

「この場にご参列いただきました皆さんを代表して、長距離の飛行でお疲れのところ、私どもが催す歓迎会に出席していただいたことに対し、リンドバーグ大佐および夫人に心からの感謝の気持ちをお伝えできて光栄です。」

「お二人は危険と直面しながら、不安定な気象状況と寒さ、そして濃霧という困難に見舞われながら何千マイルも空を飛んでこられました。そして今、これらの危険を克服して根室の町に無事に到着されました。私ども町役場関係者一同および根室町民がこのように大胆な飛行家たちを迎えるにあたり抱いた歓喜に優るものではありません。」

「皆さん、どうぞリンドバーグ大佐と夫人に乾杯をお願い致します。お二人の日本訪問によりアメリカと日本の相互理解が益々深まりますように！」

飛行機の点検

祝宴は長いものではなかったが、終る前に夫妻は安藤町長とその家族とともに記念写真におさまった。その後夫妻は旅館に送られて、短い休息をとった。リンドバーグ夫人は部屋にとどまっていたが、大佐は港まで足を運んで飛行機を点検し、夜に備えて錨でしっかり止めてあることを確認した。

大佐の話では、飛行機の状態は何ら問題がないとのことであった。夫妻が計吐夷島と武魯頓湾^{ムロトン}で、原因を突き止めて修理するのに何時間も費やして苦勞した故障は、点火プラグの目詰まりであった。水曜日の午後に着水した後、計吐夷島近海で長い距離を航行したからであった。

午後6時、安藤町長はリンドバーグ夫妻のもとを訪れ、「カネシメ」〔吉田楼〕に設けられた芸者のお座敷に招待した。そこには根室中の芸者衆が勢ぞろいして、細やかで巧みな所

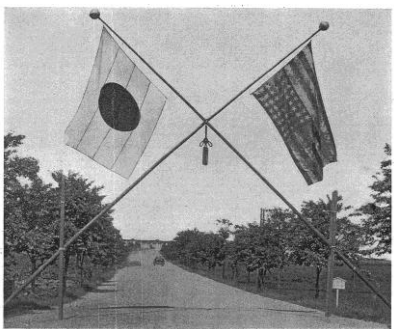
作で踊りを披露した。この宴会は内輪で開かれたものであり、参加者はリンドバーグ夫妻、スィフト大使、安藤町長のみであった。

24日の夜はゆっくり休み、翌朝、夫妻は8時頃に起床した。二美喜旅館の女中達はみんな、夫妻の行動すべてに非常に興味津々だったので、なにひとつ見逃さなかった。また、見聞きした出来事は全員にすぐさま伝わった。日本でも外国人夫婦の存在は珍しくはないが、リンドバーグ夫妻ほど脚光を浴びる人物はめったに訪れるものではない。それゆえ、夫妻の行動の一挙一投足が広く注目を集めたのである。

女中達の話によると、「夫妻は日本の浴衣を着て旅館の1階にある洗面台に並んで歯を磨き、リンドバーグ大佐がひげを剃る間、仲睦まじく言葉を交わしていた」とのことである。二人がとった朝食はトーストとミルクだけという軽いものであり、その食事中に安藤石典町長が挨拶のために訪れた。夫妻は町長に昨晚の宴会は素晴らしかったと礼を述べた。

リンドバーグ夫人は手紙を書くために旅館の部屋で過ごしたが、大佐は到着した時に身に付けていたオイルの染みがついたカーキ色のシャツとズボンに着替え、飛行機の具合を調べるために港に向かった。修理は数ヶ所で完了したが、1時間もたたないうちに、大佐は燃料の補給にとりかかった。積み込んだのはスタンダード・オイル社から提供されたガソリン950リットルと78リットルのバキューム潤滑油である。これらの燃料はこれまでの飛行でその性能が証明されているのだと、大佐は語った。

正午少し前、大佐は旅館に戻って着替え、町議会主催の午餐会に出席のため、リンドバーグ夫人をともなつて出かけた。そのあとの午後にはシリウス号に戻り、集まった航空関係者にこの水上飛行機の特徴を説明した。この聴衆には、修理の手助けが必要な場合に備えて東京から派遣された技術者も加わっていた。



The little city on the northernmost tip of Hokkaido did its best to provide a big city welcome for the aerial visitors. American flags must be rare there, yet one was found. The fact that it was hung with the field of stars in the lower corner distinguished nothing from the heartiness of the greeting.



Mrs. Lindbergh with one of her youthful admirers.

【写真説明】 左 「北海道の北東のはずれの小さな街は、空からの訪問者を大都市と変わらない歓迎振りで迎えた。星条旗は当地ではめったに手に入らないに違いないが、それでもひとつ見つかった。星の部分が下になって掲げられてはいるが、歓迎の挨拶に込められた真心はまったく変わらない。」

右 「リンドバーグ夫人、幼いファンと一緒に。」（花束贈呈）

1931年8月26～27日

東京と霞ヶ浦に リンドバーグ機、極地を越え、帝都までの長い旅を終える

熱狂に包まれる霞ヶ浦と東京 この地を訪れた外国人賓客の中で、
かつてないほど大きく湧きあがった熱烈な歓迎振り
——海軍飛行場の栈橋に飛行機が到着、多数の名士が出迎え——

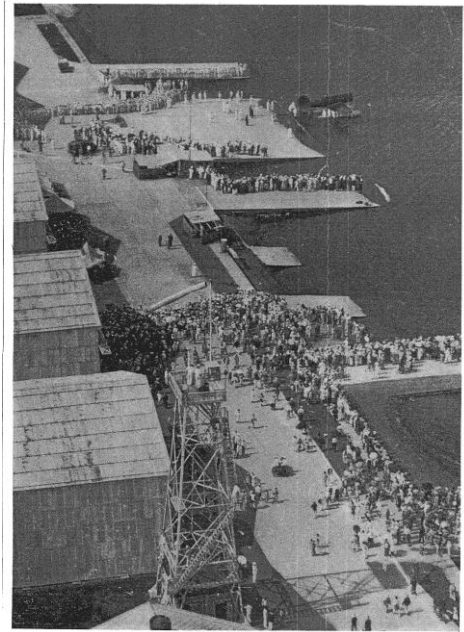
8月26日午後1時9分、赤と黒に塗り分けられ整備のゆきとどいたチャールズ・A・リンドバーグ大佐と夫人の水上飛行機は、熟練したパイロットに操縦されていることを証明しながら、そよ風にさざ波のたつ霞ヶ浦に着水した。リンドバーグ大佐と夫人が海軍航空隊の飛行場に上陸した時から東京で仮の宿に入るときまで、その進むさまは、あたかも凱進行進のようであった。二人を日本に迎えた歓迎ぶりは、その押さえがたい熱狂から、これまでこの地に迎えた外国人賓客に示されたうちでも、最大のもののひとつに数えられるであろう。

リンドバーグ夫妻の飛行機が姿を現すかなり前から何千人もの熱心な群集が飛行場に押し寄せ、シリウス号の最初の姿を捉えようと空をじっと見つめていた。午後2時5分、群集のなかでも特に視力の良い者が、みるみるうちに近づいてくる太平洋横断機の姿をついに見つけた。それを知って大群集は興奮し、見物人たちはいっせいに湖岸に押し寄せ、やや霞のかかった青空を熱心に見つめた。飛行機の一群が湖に近づいてくると、9隊編成の飛行機のなかにリンドバーグ機の際立って特徴的な輪郭はたやすく見分けることができた。

格納庫上を旋回

リンドバーグ機の姿が見えたかと思うと、飛行機は湖岸沿いに並んでいる格納庫の上までやってきて、なにひとつ見逃すまいと、華麗な飛行テクニックを目で追う群集の頭上を飛んだ。リンドバーグ大佐は東から湖に入り、格納庫の後方で機体を大きく傾けて旋回し、ふたたび湖上に出た。そして、岸に向かって吹いている風向きも気にかけず、大佐は飛行機を長距離滑空させて、優雅な流れるような動きで湖に着水し、シリウス号を迎えるべく指定されている浮き栈橋にまっすぐに向かった。陽光を浴びて輝く銀色のフロートが大きな白い水しぶきをあげながら、いとも易々と水上飛行機用の浮き栈橋まで水上を滑走していった。同機が岸に近づいてくると、前方の水面と栈橋が良く見えるようコックピットの中で立ち上がっているリンドバーグ大佐の姿が見えた。飛行機は浮き栈橋に緩やかにぶつかり、機体が揺れないように安定させ、乗っているリンドバーグ大佐と夫人を手助けするために海軍水兵の一団が駆け寄った。

リンドバーグ大佐はぎこちない動作でコックピットから這い出て、最初の挨拶の印として、群集に向かって少年のような満面の笑みを浮かべて見せた。そのすぐ後、大佐は飛行機に注意を向けて、フロートを繋ぐ支柱のうち、大きな木片をあてがって補強してあるのを見てとれる一本を念入りに調べた。それからコックピットの後部に戻り、リンドバーグ夫人が飛行機の翼の上に降り、さらにフロートの上に移るのに手を貸した。そこからは、上陸の手助けをするために派遣された日本人水兵たちの逞しい背中に背負われて岸辺に運ばれた。



Scene at the seaplane wharf of the Kuremura Naval Airfield just before Colonel and Mrs. Lindbergh completed their long flight to Tokyo.

【写真説明】 霞ヶ浦海軍航空隊飛行場の水陸両用飛行機用埠頭にて。リンドバーグ大佐夫妻が東京への長距離飛行を終える直前の様子。

群集、非常線を突破

リンドバーグ大佐夫妻が岸にたどり着いたとたんに、公式に予定されていた歓迎の式次第は、熱狂的な群集によっていきなり無視されてしまった。人々はすべての非常線を乗り越えて、英雄を称える気持ちをあらゆる言動で表現しながら微笑んでいる夫妻を取り囲んだ。アメリカ大使は、トーマス・克蘭フォード・ジュニア中尉とともにやっとのことでリンドバーグ夫妻のそばにたどり着くと、東京にほど近い霞ヶ浦海軍航空隊の飛行場にいたるワシントンからの長距離飛行を成功裡のうちに成し遂げた祝辞を述べた。そのあと大使は、海軍大臣・男爵安保清種氏、通信大臣・小泉又次郎氏、大使館職員YMCAのラッセル・ダーギン夫妻、ほか日本人高官と著名な在日外国人たちを紹介した。

ぎっしりとすし詰めになった群集の間に通り道ができると、すぐにリンドバーグ大佐夫妻は飛行機の着水地点近くに並ぶ広い格納庫のひとつに案内された。ここでもリンドバーグ大佐の一番の関心事は自分の飛行機のことであり、絶えず後ろを振り返って、作業が滞りなくすすめられていることを確かめていた。シリウス号を格納庫に収納するのを監督したいという、個人的な強い希望の表れである。この作業には海軍基地の地上整備員がその任にあたり、フロートの下に特別に工夫された運搬台を置いた。

格納庫の中では、有名人・リンドバーグ夫妻に対する紹介が、さらに次々に行われた。しかし、このつらい試練の間中、リンドバーグ大佐も夫人も、このうえない平静さと人柄の良さを見せていた。大佐は相手の心にすぐ伝わる健全なユーモアと気取らない振る舞いで、一

方、リンドバーグ夫人は穏やかで好感のもてる明るい人柄で、たちまち日本人の心をつかんだ。リンドバーグ大佐と夫人は少しの間別々になり、その間にリンドバーグ大佐は飛行機のコックピットまでよじ登って、問題がない事を確認し、紙にくるまれた書類と飛行日誌などの携帯してきた少しばかりの手荷物を持ち出した。

大佐の話では、着水直後に判明したオイルの漏れはオイルタンク上部の傷が原因とのことであった。飛行の体勢を取っている時には何ら問題ないが、飛行機の尾部が下がると、漏れが生ずるようだ。また、支柱の損傷はペトロハバロフスクから武魯頓湾^{ムロトン}までの飛行中に被ったなんらかの負荷によるものであるが、これもまた深刻な問題ではないとリンドバーグ大佐は言った。

格納庫がますます混雑してきて、疲れてはいるが幸福な夫妻に午後の暑さがこたえてきたため、霞ヶ浦飛行場の別の場所にある海軍士官クラブに移動することになった。リンドバーグ大佐は移動する前に飛行機の管理について最後の指示を出した。夫妻は、アメリカ大使、ラッセル夫人、クランフォード中尉とともに一台の車に乗り込み、その後に歓迎会の来賓を乗せた20台の車の一隊がクラブまでに続いた。リンドバーグ夫妻が格納庫を出て姿を現すと、霞ヶ浦の岸边に押し寄せた群衆は、ふたたび熱狂の歓声を上げつづけ、通り道に沿って並んだ生徒達は旗を打ち振りながら甲高い声で「リンディ、リンディ、万歳!」と叫んだ。

休息のために退席

海軍士官クラブに到着すると、リンドバーグ大佐と夫人は長時間の飛行と熱のこもった歓迎を受けた後なので、必要な休息をとるためにしばらく退席した。150名ほどの名士たちがクラブの宴会場に集まり、リンドバーグ大佐と夫人の登場を待っていた。来客たちは長くは待たされなかった。ほどなく、フォーヴス駐日アメリカ大使、ラッセル夫人、米国大使館参事官のエドウィン・ネビル氏夫妻、そして海軍大臣に伴われて夫妻が現れた。

リンドバーグ大佐夫妻と一緒にメイン・テーブルについたのは、駐日アメリカ大使、ラッセル夫人、ネビル夫妻に加えて以下の人々である。海軍大臣安保男爵、小泉又次郎氏、陸軍次官杉山〔元〕中將、霞ヶ浦航空司令小林〔省三郎〕海軍少将、海軍省航空本部長安東昌^{はじめ}喬中將、逋信省政務次官牧山〔耕蔵〕氏、外務省欧米局長松島肇氏、逋信省航空行政局長戸川政治氏、日米協会代表樺山〔愛輔〕伯爵、浅野造船社長及び日米協会事務局長小松〔隆〕氏。

リンドバーグ大佐夫妻および来客に向けられた祝辞は、小松氏によって、次ぎのように通訳された。

安保海軍大臣は次のようにスピーチを始めた。

「1927年、リンドバーグ大佐は画期的なニューヨーク・パリ間無着陸飛行を成し遂げ、大西洋横断ルートを開拓しました。この偉大な業績の重要さは、世界中の人々の心から消し去ることは絶対に出来ません。世界中で最も困難と考えられていた最北端ルートの飛行を成し遂げた後、本日この場にリンドバーグ大佐にお出でいただきました。とりわけ、我が海軍の航空隊で大佐をお迎えする機会をもてたことは、わたくしどもの喜び且つ誇りであります。」

「また、長く困難な空の旅の間、大佐に同行し、優秀かつ熟練した無線技術できわめて貴重な援助を提供したリンドバーグ夫人の勇敢さと不屈の精神に対しては、いまなお、心からの敬愛と尊敬の気持ちを押さえることはできません。事実、リンドバーグ大佐と夫人は天が遣わした平和の使者であり、お二人の我が国訪問は、日本とアメリカの国民の心に人間味溢れる友愛の気持ちを新たに呼び起こし、両国の真の理解とより緊密な関係を展させることでしょう。」

「リンドバーグ大佐ならびにご夫人、日本では夏の盛りを過ぎ、間もなく爽やかな秋を迎えようとしております。国民ばかりでなく、自然もお二人に対する歓迎の意を示そうとしております。お二人が我が国と人々の両方を存分に楽しみ、我々の心からの好意と善意の気持ちに対して永遠の確信を抱いてアメリカに戻られることを心から願っております。」

「また、お二人のために、あらゆる便宜を出来る限り図るつもりでおりますことを、あらためて申し上げます。わが国の航空隊は、いかなる援助のご要望にもお答えできるよう待機しております。では、皆さん、リンドバーグ大佐と夫人に敬意を表し、万歳のご唱和をお願いいたします。」

リンドバーグ大佐の返礼

リンドバーグ大佐はつい引き込まれてしまいそうな、いつもの少年っぽい笑顔を浮かべながら立ち上がり、海軍大臣の祝辞に答えるスピーチをした。日本語に通訳したのは小松氏である。小松氏は次のように通訳した。

「日本に初めて到着して以来、私たちが受けた暖かいもてなしに対して、このたび日本の皆さんに感謝する機会を持つことができ嬉しく思います。千島列島をはじめ、私たちが訪れたどの場所でも、最高のもてなしと歓迎を受けてきました。一昨日の晩は、私たちのことを誰も知らない村でさえ、漁師の方が小屋に迎え入れてくれました。その漁師の一家は、私たちにありとあらゆるものを分け与えてくれました。私たちは日本語を話しません。その一家も英語を話しません。しかし、私たちは非常に楽しくその晩を過ごしたのです。」

「短い日本滞在ではありますが、より多くの日本の皆さんにお会いして、知る機会が持て

ることを大いに期待しております。ご清聴ありがとうございました。」

JOAK放送局の職員数名がリンドバーグ大佐夫妻の到着場所だけでなく、士官クラブでの歓迎会の会場にもマイクロフォンを設置していた。着陸の模様と歓迎会でのスピーチは東京に中継され、そこにある本局から放送されたのである。

6ページ 写真のみ

歓迎会が終わった後、リンドバーグ大佐夫妻は少人数のグループとともに個室になっているクラブのダイニング・ルームに引き下がり、そこでは夫妻に敬意を表して昼食会が催された。この昼食会は二人にとってくつろげる良い機会だったので、その間、邪魔が入らずゆったりと過ごせるようにとあらゆる努力がなされた。一方、群衆は時の英雄の姿をもう一度、ひと目見るまで立ち去ろうとせず、歓迎行事が長時間にわたり行われている間中、クラブの建物の周りに集まっていた。その後、リンドバーグ大佐夫妻はクラブの特別室で新しく知り合った人々と雑談を楽しんだ。ここは2年前には天皇陛下が謁見なさったこともある部屋である。

一行は霞ヶ浦を出発

リンドバーグ大佐がある場所から次の場所へと移動するたびに、それに先立って1日中生じていた活気と緊張が戻った。そして夫妻は歓迎会に出席した政府関係者とともに士官クラブから出発した。リンドバーグ大佐夫妻に送られた美しい花束と贈り物を満載した自動車が土浦の駅まで夫妻に同行した。一行はそこから列車で東京に向かった。

霞ヶ浦のクラブで昼食会に出席したのは以下の人々である。——アメリカ大使、ラッセル夫人、ネビル夫妻、海軍大臣、逓信大臣、牧山氏、杉山陸軍次官、安東海軍中将、トヤマ氏、小松氏、マツシマ氏。

土浦駅では、またもや騒々しい歓迎がリンドバーグ大佐を待ち受けていた。駅舎の正面の広場には熱狂的な歓呼の声をあげる人々が密集し、ごった返していた。リンドバーグ大佐はにこやかに歓迎にこたえて、駅舎の中に入っていった。大佐と夫人は日本政府高官とアメリカ大使館職員に付き添われていた。列車が到着するとリンドバーグ大佐夫妻は最後尾から3両目の二等車の車両に乗車した。その車両は政府関係者と新聞記者と物見高い人々でたちまち満員になった。

東京への凱進行進が始まった。リンドバーグ大佐が乗車したという知らせが人々の口から口へ伝えられると、駅のプラットフォームにやって来る人々の数も、その熱狂も増すばかりであった。東京に着くまでの2時間の車中で、リンドバーグ大佐は日本政府高官たちと歓談し、日本滞在中の予定をたてた。

海軍大臣は最後尾の車両に乗車していたが、列車の旅の終わり近くになると、リンドバー

グ大佐は大臣のところへ行って話をした。二人はかなり長い間、一般的な話題について話をし、またリンドバーグ大佐は非常に興味を持ったと思われる風景について海軍大臣・安保男爵に多くの質問をした。

リンドバーグ大佐夫妻が東京に到着して受けた歓迎は、熱狂的な興奮の自発的な爆発としては、かつてないほどの規模のものであった。午後6時20分、土浦発の列車が上野駅に入った時には、プラットホームはぎっしりと人々で埋まっており、リンドバーグ夫妻が乗車している車両をつきとめるや否や、人々はそこに向かって押し寄せた。

一行が群集で埋め尽くされた駅の通路をゆっくりと出口に向かって進んでいる時、人々は熱狂的な歓声をあげ、日米の国旗を組み合わせた旗を打ち振った。リンドバーグ大佐夫妻がようやく出迎えの車のそばまでたどり着いた時には、興奮した群集は暴動一步手前の状態であった。リンドバーグ夫妻が乱暴に扱われることは全くなかったが、群集の中には混雑の中でひどい打撲傷を負うものが多数いた。警官と憲兵の一団は群集を規制することができず、航空界の第一人者とその妻をもっと近くで見たくてたまらない人々は、一行の通り道を確保するために設けてられていた境界線を越えてしまった。

歓呼の声をあげている群集は、駅出口の数区画の往来を麻痺させるほどであった。そこからさらにリンドバーグ夫妻が向かったトイスラー邸にいたる道の両側に鈴なりになっていた。道路沿いには規制のため600名におよぶ特別職員からなる警察予備隊が出動していたが、トイスラー邸でも上野駅の光景が再現された。

リンドバーグ夫妻がトイスラー邸に到着する少し前、1機の飛行機が上空を飛び、日本飛行訓練学校の生徒達からの歓迎のメッセージを落とした。それを『ジャパン・アドバタイザー』の代表者が拾い、リンドバーグ大佐宛でクランフォード中尉に託した。

リンドバーグ夫妻を乗せた列車が東京に近づくにつれて、すべての駅のプラットホームは夫妻を熱心に捜す人々でいっぱいになった。夫妻はすぐに見つけることが出来た。というのも、列車の全乗客の半分ほどは、リンドバーグ夫妻の客車に押しかけていたからである。各々の駅には列車が停車している間、数名の警察官が気をつけの姿勢でいかめしく立っていた。

早々と集まる群衆

午後3時40分、土浦を出発した長い編成の列車は、多くの出迎えの人々を乗せて東京に戻った。この列車にリンドバーグ夫妻が乗車する予定だと知らされていたので、途中の駅に集

まった人々は計画の変更に気づかずに、有名な夫妻の姿をひと目見ようと車窓から中を覗き込んでいた。間違われて挨拶された外国人もなかにはいたが、人々が待ち受けている夫妻の顔は新聞に掲載された写真でよく知られているので、さほど多くの人違いは起こらなかった。

上野駅に近い線路の脇には見物人が立ち並んでいた。だが、真剣な群集は列車の目的地に向かって行った。一方、駅の構内ではプラットフォームの出口が人波で埋まり、外の通りには列車到着の1時間前から人々が並んでいた。上野駅から築地に至る昭和通りでは、警察官が増えつづける群集を整理するのに追われていた。建物の2階の窓から身を乗り出す者がいるかと思えば、屋根の上に立っている者もいる。東京日日新聞社の車が大通りを往復しながら、日本とアメリカ合衆国の国旗を対角にあしらい日本語で「ようこそリンディ」と書いてある紙の旗を人々に配った。

水曜日の朝、東京と横浜の居留地からやってきた陽気なアメリカ人の一行は、霞ヶ浦でリンドバーグ夫妻の出迎えに合わせるために、9時50分発の土浦行きに乗ろうと上野駅に来ていた。発車予定時刻のかなり前から、それぞれ3、4人かそれ以上の人数のグループでやって来た。トーマス・克蘭フォード中尉は、この霞ヶ浦行きを取り仕切るために、早めに駅に来ていた。リンドバーグ夫妻の東京滞在中、宿泊先を提供したR・B・トイスラー博士夫妻も早めに来た一組である。そのすぐあとからやって来たのは、アメリカ大使、ラッセル夫人、そしてアメリカ大使館職員E・L・ネビル夫妻、大使館付海軍武官イサク・ジョンソン大佐、同じく大使館付陸軍武官ジェームズ・G・マッキロイ中佐、メレンディ海軍少佐、ケネス・B・ポッター夫妻、メリル・ベニンホフ夫妻、ハレック・A・バッツ夫妻、ポール・スタイントーフ夫妻、そして東京総領事アーサー・ギャレルズ氏である。

客車の扉が開く少し前には、J・R・ギアリー氏、E・W・フレーザー氏、そして日米協会の代表・樺山伯爵が到着した。アメリカン・クラブ代表のクラレンス・C・スミス氏とジョン・ライフスナイダー氏も早めに来ていた。アメリカ協会代表のマクファーランド・ヘイル氏もいた。YMCAのラッセル・ダーギン氏も早めに到着したひとりである。野尻湖から一時的に帰京したばかりのT・B・ウォルサー夫人も一緒であった。

列車の発車時刻までに到着した人々のなかには、スタンダード・オイル社のエルマー・ペネル氏夫妻、アメリカ東京領事館のチャールズ・ハッチンソン氏、アメリカ横浜領事館のエドモンド・D氏、B・W・フライシャー夫人、マイルズ・W・ボーン夫人、ジェイムズ・ハウ夫人、バートン・クレーン夫人、S・アイザックス氏、ウィリアム・ターナー氏、ダウド

夫妻および子息二人と令嬢、アメリカ協会横浜支部を代表してJ・C・グールド夫妻などの人々がいた。

同じ列車に乗車した日本人名士の中には、樺山伯爵、白洲次郎夫妻、飛行技術に対する興味と堂々たる髭で有名な長岡〔外史〕^{がいし}中将、航空隊長イトウ中将、商業航空運輸株式会社の西野〔恵之助？〕氏、日本大使館での2年間の任期を終えてワシントンから戻ったばかりのT・サナギ氏、陸軍省のクワムラ大佐、海軍大臣からリンドバーグ大佐夫妻に贈呈された花かごの責任者である海軍省のY・クラマタ氏、横浜税関のM・ナカジマ〔中嶋？〕氏、ほか多くの人々である。

リンドバーグ大佐が単身で8月26日に霞ヶ浦に到着したとしても、それは大事件だったろうが、彼が妻のアン・モロウ・リンドバーグと連れだってやってきたことで、歓迎はさらに熱烈になった。

霞ヶ浦で、リンドバーグ夫人が輝く単葉機から降りて栈橋で大佐と一緒にになったとき、群衆の興奮は最高潮に達した。「万歳」と歓呼する叫び声は耳をつんざくばかりの大音声に膨れ上がった。この高名な飛行家夫妻に会ったことのない者でも、大佐の顔は写真で見てすぐに本人と分かる。リンドバーグ夫人にはカメラが捉えられない、言葉でも表現しがたい特質があった。そして、夫が挑んだ大胆な空の旅で見事にパートナー役を果たしたこの若き婦人の姿を心ゆくまで見ようと、何百組もの瞳がひたむきに見つめていた。その目が捉えたのは、平均より小柄な背丈の、ほっそりとした優雅な若い女性であり、ボーイッシュな飛行服とともに、疑いようもない気品のある雰囲気をもっていた。

歓迎にこたえる

リンドバーグ夫人はカーキ色の半ズボンををはき、その上には、黒っぽい眉毛の下に深く彫り込まれた澄んだ瞳の色を引き立たせるブルーのシャツを着ていた。ぴったりとした白い飛行帽の下からは黒い巻き毛がふたつの房となって下がっており、やや高めの額は剥き出しになっている。

熱狂的歓迎に対する応対は、感じの良い落ち着いたもので、相手を惹きつける内気さも少々備わっていた。著名人である夫の微笑みは、魅力的なことでとても有名であるが、リンドバーグ夫人の微笑みも、それに負けず劣らずである。笑うと輝く白い歯をちらりと覗かせ、ブルーの瞳が人を惹きつけるようにキラキラとして、表情がぱっと明るくなる。黒っぽい髪と睫毛とくっきりとした眉毛がその瞳の色を引き立たせており、顔立ちは繊細である。振る舞いは打ち解けて好意的であるが、その表情からは気骨と決断力に溢れた性格の持ち主であ

ることがよく伺える。

リンドバーグ大佐と夫人は、霞ヶ浦で壮観な着水を遂げたあと、忘れることのできないイメージを残した。その場に居合わせた人々は、このイメージをこの先永く心にしまっておくことであろう。大佐はグレーの半ズボンとグレーのフランネルのシャツを身につけ、大佐も夫人も絵に描いたような飛行服姿で、まわりの人々を引き込む漂泊者のような雰囲気を漂わせ、全群集を空を駆け巡る魅惑の冒険旅行に、ともに飛び立たせたようであった。

浮き栈橋から水上飛行機のために準備された格納庫に送られて行く途中、リンドバーグ夫人は呼び止められ、海軍省からの大きな花かごを贈呈された。手渡したのは吉成大尉令嬢である。吉成氏はニューヨーク滞在中であり、以前リンドバーグ大佐と会っている。

花かごは彩り鮮やかで手の込んだアレンジが施されており、一番上にはアメリカと日本の絹の国旗が飾られていた。艶やかなブルーの振袖姿の吉成嬢につづいて、多くの日本の新聞社および各機関の代表者たちが、皆見事な花の贈り物を手に、集まっていた。徳川公爵は日米協会を代表して豪華な蘭の花束を贈った。土浦の市民は黄色いバラとピンクのカーネーションの巨大な花束を贈り、そのほかに花を贈ったのは、松竹、帝国飛行協会、そして大阪毎日、朝日、日日とその他もろもろの新聞社各社である。贈呈された花束は、あまりに数が多く重かったので、リンドバーグ夫人がひとりではとうてい持つことが出来ず、大使館の若い女性職員、トーマス・克蘭フォード夫人、ハレック・バッツ夫人、ケネス・ポッター夫人、そしてメルル・ベニンホフ夫人の手を借りながら受け取った。

リンドバーグ夫人はようやく格納庫にたどり着き、まわりに押し寄せてきた数多くの熱心な同国人たちと握手を交わした。アメリカ大使W・キャメロン・フォーブス氏、ジェイムズ・ラッセル夫人、そしてエドウィン・ネビル夫人が礼儀正しくも気取らずに紹介の労をとった。大佐と夫人が押し寄せる人々につぶされぬようかばいながら、希望する人々全員が夫妻と握手できるよう、配慮しながらの紹介であった。

海軍士官クラブに着いて、大佐とリンドバーグ夫人は5時間の飛行後はじめて顔や手を洗って、着替える時間を持つことができた。霞ヶ浦の着水に立ち会った人々全員が自由に参加できる歓迎会の会場となっている宴会場にリンドバーグ夫人が現れると、再びすべての人々の視線が夫人に注がれた。

夫人の衣装替え

リンドバーグ夫人は飛行服から着替えて、シャンタン・シルクの涼しげな白いカジュアル・ドレスといういでたちであった。ドレスは注文仕立てのワンピースと丈の短いジャケット、そしてそれに合う、つばのせまい帽子がセットになっている。リンドバーグ夫人はジャ

ケットの下にサファイア・ブルーの幅の広いスエードのベルトを締めており、洗練された白い帽子には、同じ色の細いバンドがただひとつのふち飾りとしてついていた。履いているカジュアルな靴も人目を引く装いにぴったりあっており、白に濃いブルーの皮の縁取りがしてある。ストッキングの色は小麦色で、透かし模様がはいっていた。

多くの興味津々の人々は、リンドバーグ夫人が、珍しいことに、全く化粧をしていないことに気づいた。夫人の顔は程よく日に焼けており、格別に気品のある容貌をこれ以上際立たせる効果のある衣装を選ぶことはできなかったであろう。

荷物について訪ねられると、夫人は、とても軽いものであるが持参した荷物の中にはイブニング・ドレスが2着あると答えていた。

リンドバーグ夫人と大佐は、上野駅に到着後案内された築地のトイスラー邸で二人を待ち受けていたゆとりとくつろぎを、心行くまで味わったに違いない。

昨年、冬、アメリカ大使官邸として使われたこともあるトイスラー邸は、多くの一般大衆に知られている。邸宅は築地が日本在住のアメリカ人居留地であった時代に、もとのアメリカ公使館があった場所に建てられている。実際、屋敷の庭には、東京で2番目に建てられたアメリカ公使館の一部であった石材そのものが、いくつか残っている。最初に建てられた公使館の場所は麻布の寺の境内であり、タウンゼント・ハリスが居住していた。

リンドバーグ夫妻は2階にある続き部屋を使用した。主寝室からは隅田川が見渡せる。この部屋は、ウッドロー・ウィルソン元大統領夫人が東京のトイスラー家を訪れた際に泊まった同じ部屋であり、「東京での滞在を楽しむことが出来たのは、この部屋のおかげによるところが大きい」とウィルソン夫人はたいそうと熱心に語っていた。カーテンは落ち着いた色合いのグリーンのシルクで、家具の材質はマホガニーである。また、壁には調和のとれた色彩の錦織の織物が飾られている。

夫妻が持ってくる荷物が当然軽いと分かっていたので、ラッセル夫人は日本滞在中の必要を満たすべく、前もってドレスを2着あつらえる手配をしていた。1着は花模様のブルーのシフォンで、幅広のケープカラーと短い袖とスカートの裾には、ひだ飾りがついている。もう1着は揃いのジャケットのついた白いカジュアル・ドレスである。2着ともラッセル夫人の管轄のもと、軽井沢のテーラーで仕立てられた。寸法をとるために、T・トッドソン・スタンプ夫人の服が使われた。リンドバーグ夫人とスタンプ夫人の体型がほぼ同じくらいだと推測されたからである。

築地のトイスラー博士の家に面した通りは、男性も女性も子供も、興奮した群集が押し寄せ、偉大な空の英雄をひと目見ようと躍起になり、リンドバーグ大佐とその勇敢な妻に万歳をあげようと待ち構えていた。一方、邸宅を囲む塀の中の庭では、到着後直ちにリンド

バーク夫妻に対して行われる予定のインタビューの最終準備がすすめられていた。トイスラー邸の広々とした応接室の窓の外にある、旗で飾りつけられたテラスは、インタビューに最もふさわしい場所として整えられており、リンドバーク大佐と夫人、そしてアメリカ大使のために椅子が整然と並べられていた。

トイスラー邸の玄関にリンカーンが到着すると、警察官は車のまわりに押し寄せる熱狂的な群集を押さえるのに大変苦勞した。リンドバーク大佐と夫人、アメリカ大使、ラッセル夫人がその車に乗って上野駅からやって来たのである。警察官はかろうじて群集を押しとどめ、その隙になんとか大佐と夫人は門をくぐる事が出来た。実際、一行が歩道にたどり着くことが出来る前に、群集は警察の警戒線を破り、リンドバーク大佐と夫人は大変な苦勞をして邸宅の入り口をなんとかくぐる事ができたのである。アメリカ大使とラッセル夫人にとっても、誰も入れないように門が閉ざされるまで、どんどん押し寄せてくる群衆の間を通り抜けるのは非常な困難であった。インタビューに立ち会うことを許された新聞記者たちが応接間に面した、旗で飾られたテラスに移動している間にも、車の警笛と警察官の命令する声が混ざった騒音と重なって、散在する群集があげる歓声が聞こえた。

インタビューの手配をしたクランフォード中尉が発行した、手書きの許可証を最初に提示しないと参加が許可されないのので、参加者の数は限られていた。だが、旗で飾られたテラス周辺の庭は人々で埋め尽くされ、大佐とリンドバーク夫人を撮影するためにやってきた活動写真の撮影隊とカメラマンのためのスペースがかろうじて残っているだけだった。

インタビューに先立ち、クランフォード中尉から発表があった。リンドバーク大佐は、活動写真の撮影班とカメラマンの撮影を新聞記者のインタビューの前に行くことを強く希望している、とのことであった。撮影に許された時間は10分間で、インタビューの間の撮影は許可しない、と説明があった。やがて10台あまりの照明灯にスイッチがはいり、間もなく観音開きのガラス扉から大佐とリンドバーク夫人が、つづいてアメリカ大使が出てきて、3名のために用意された椅子に腰をおろした。リンドバーク夫人は中央の大きなフィリピン製の籐椅子に座った。ラッセル夫人、E・L・ネビル夫妻、トーマス・クランフォード・ジュニア中尉および夫人、そしてメリル・ベニンホフ夫人が3脚の椅子の後方に並ぶと、フィルムの撮影カメラがカタカタと音をたてながら何百フィートものフィルムをまわし、写真のカメラマンはあわただしくスチール写真を撮影した。10数台以上もの照明灯がまぶしく照らし、撮影隊があわただしく場面を「撮影」する様を見ると、ハリウッドで大作映画の山場シーンを撮影する様子に匹敵するのではないかと思わせる。誰もがそれほど活力に満ちてリンドバーク大佐と夫人に注目することに関心を向けていたのである。リンドバーク大佐と夫人はその状況を楽しんでいた。二人の表情からもそれが見てとれた。

カメラマンと活動写真の撮影隊が望むだけの写真と映像を撮り終えると、——もともと、撮りたい写真をすべて撮った日本のカメラマンは知らない、と冗談を言う者もいたが——待ち望まれたインタビューが始まった。しかし、クランフォード中尉は、インタビューが実際に始まる前に新聞記者たちが集まって、質問をする代表者をひとり決めておいた方が賢明ではないかと思う、と自分の意向を前もって知らせておいた。さもないと、すべての記者が質問し始めて混乱を招くであろうから、というわけである。マイルズ・W・ボーン氏が新聞各社の代表になることに決まり、大佐の希望で照明灯のまぶしい明かりが一部消され、質問が始まった。

今回の旅全体についてと途中の危険について質問を受けると、「旅行全体については、このインタビューの間に語ることは難しい」とリンドバーグ大佐は指摘した。大佐は、「旅行は比較的楽であった」と述べた。というのも、「すべてが適切に手配されており、飛行ルートのどこでも適切な援助を受けることが出来たので」と語った。

旅行中で最も危険な場面について語った時は、「計吐夷島^{ケトイ}での事故が最も危険な瞬間のひとつであったと思う」と答えた。その時はロープが切れて錨を失い、飛行機が漂流し始めたのだ。だが大佐は、出来る限り、あらゆる援助を提供しようと、近海に待機していたシムシル丸の船長と船員に大変うまく助けられたことを付け加えた。

次に出された質問のひとつは、太平洋ルートによる航空便の実現性についてであった。リンドバーグ大佐は、「今すぐにでも問題なく実現することができる」と答えた。「しかし、そのためには、まず気象情報を入手できるようにルートに沿って気象観測所を設ける必要がある」と付け加えた。また大佐は、「航空技術の進歩は無線技術の進歩と密接な関連を持っている」と語った。「無線は飛行の成功に絶対に必要な技術であり、向かう先の気象状況、着陸の指示など、必須の情報を知る必要のある長距離飛行の場合には、特に必要である」と述べた。大佐の考えでは、「今後数年のうちにアメリカと日本間の飛行機の往来は増えるだろう」とのことである。

日本の新聞記者たちは、リンドバーグ大佐と夫人が日本で何を見たいのか、熱心に知りがった。この質問を受けて、大佐は笑って答えた。「妻も自分も、すべてのものに関心がある」と言った。リンドバーグ大佐と夫人が日本に到着して以来食べた日本食のことを念頭に入れて、「日本食はお好きですか?」と質問する者もいた。「すべて好きです」と笑いながら、大佐も夫人もそろって答えたが、日本人の中には言葉どおりに受け取らない者もいた。

「いや、本当に好きなんですよ」と大佐が続けて言うと、この即答を聞いて、何人かの日本人から笑い声があがった。「では、刺身はどうですか?」と、庭の暗がりから質問する声

が聞こえた。日本を初めて訪れる外国人に日本人が好んで尋ねる質問である。だが、リンドバーグ大佐は即座に答えた。「その件については、まだ判断がつきかねます」と冗談めかして答えた。

「今回の旅行について、もう故郷に手紙を書きましたか?」と、手紙を書くことが非常に好きな記者が質問をした。この質問を聞いて人々は、リンドバーグ大佐も夫人も、地球の半分以上を横断飛行している最中にそんな時間をみつけれられるだろうかと、いぶかしんだ。

「いいえ、手紙はまだ1通も書いていません。これまで手紙のことを考える余裕はまったくありませんでしたから」と答えた大佐はかなり面白がっていた。その時、人波の後方から「新聞記者が代わりに書いているので、リンドバーグ夫妻にはその必要がないのだ」と、タイミングよく指摘する声が上がった。

無線による援助を称える

これを聞いて、ひとり残らず大笑いした。その陽気な笑い声が消えないうちに、リンドバーグ夫人に無線の交信がどのようなものであったか質問した者がいた。リンドバーグ夫人は「ルート上のさまざまな無線局と絶えず連絡をとりあった。提供された非常に貴重な援助に対し深く感謝している」と答えた。夫人はかなり疲れているように見受けられ、質問に答えるのは夫に任せていた。とある記者が、「今回の旅でもっとも印象に残ったのはどのようなことだと思うか」と質問すると、彼女は「旅の最初から最後まで興味深い時間で満ちていたことを考えると、その質問に満足な答えを出すのはとても無理なことではないかと思う」と答えた。

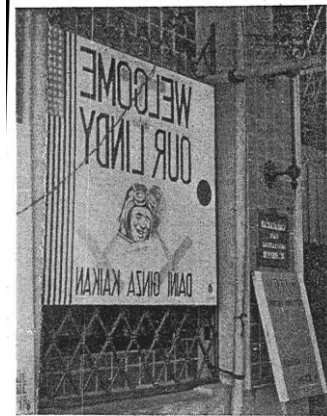
インタビューの時間は30分近くに及び、カメラマンたちが会場を立ち去った時には午後9時を過ぎていた。それでようやくリンドバーグ夫妻は解放され、くつろいで二人だけの静かな夜を過ごすことができたのである。霞ヶ浦に到着して以来、間断なく膨大な歓迎行事が詰め込まれ、それをこなすのに全力を注いだリンドバーグ夫妻の1日を思うと、昨晚のインタビューで新聞記者たちの突飛な質問に、リンドバーグ大佐も夫人も愛想よく受け答えしていたのは、二人の気さくな人柄の証であろう。

【写真説明】

右 銀座(東京の繁華街)にある飲食店の多くは、リンドバーグ夫妻の訪問を祝う飾りつけをした。このようなポスターがよく見かけられた。



Communications Minister Matajiro Koizumi, who flew to the Kasumigaura Naval Airport to greet the Lindberghs, is shown going ashore from his plane on the back of one of the seamen attached to the landing detail.

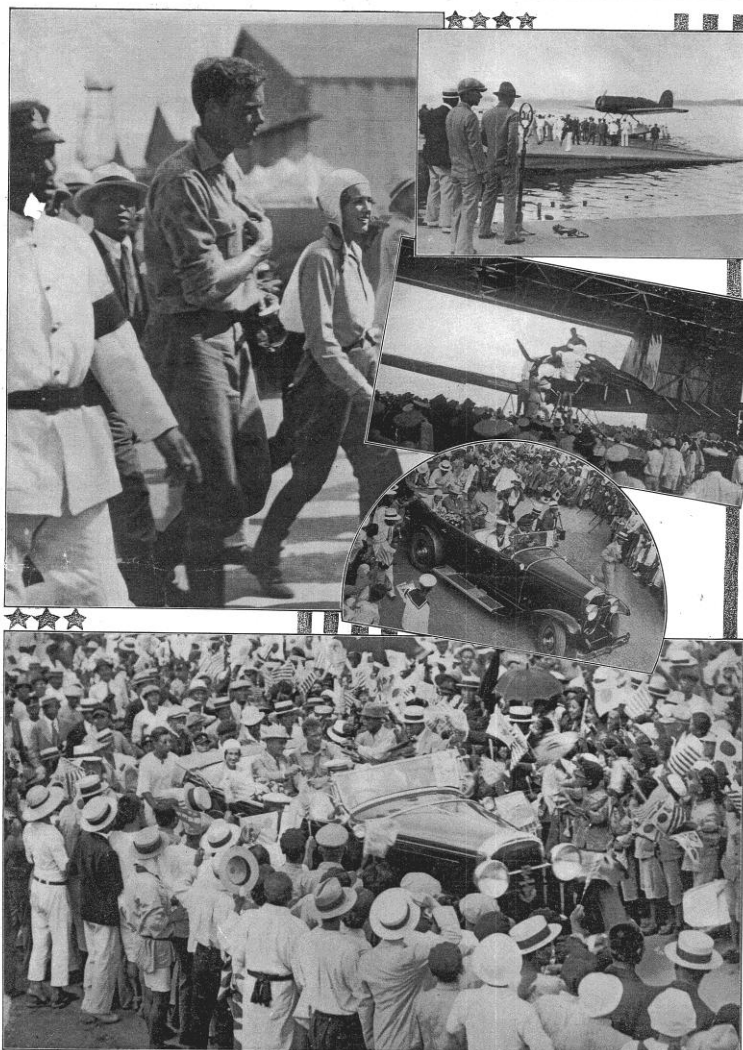


Most of the bars and restaurants along the Ginza's main business street were in gala dress for the Lindbergh arrival. Signs such as the above were common.

【写真説明】

リンドバーグ夫妻を迎えるため、霞ヶ浦海軍航空隊飛行場に飛行機で訪れた小泉又次郎通信大臣は、着水の任にあたった水兵に背負われて岸に向かった。

THE JAPAN ADVERTISER LINDBERGH EDITION, 1931



【写真説明】

左 霞ヶ浦にて、公式の出迎えを受けた直後に。
右上 霞ヶ浦着水を報じるJOAKラジオ局。
その下 格納庫に納められた飛行機の周囲に集まる人々。
最下段 東京に行く夫妻を乗せた車は土浦駅に向かう。

当時の広告↓



WITH FEELINGS of deep admiration and profound respect we avail ourselves of the opportunity offered by the visit to Japan of Colonel and Mrs. Charles A. Lindbergh to send a message of friendship to the people of the United States of America. Long and intimate association with the businessmen of that country have but served to strengthen our feelings toward it. As an influence for international peace and fair dealing the United States has earned an enviable position in the society of nations.

MITSUBISHI GOSHI KAISHA
Baron Koyata Iwasaki Baron Hidesya Iwasaki Mr. Hikozya Iwasaki